

小・中・高の段階的古典教育（その一）

——『竹取物語』を例として①——

猪川優子

はじめに

平成二九年に小学校および中学校、平成三〇年に高等学校の新たな学習指導要領が告示され、移行期間を経て令和二年より順次実施が進められている。今期の学習指導要領は、子供たちの「生きる力」の育成を改めて捉え直し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することを軸に、目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に再整理された。『学習指導要領解説（国語編）』の頁数も増え、高等学校国語科の場合、三倍近くの増量となっている。ただ、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の差異や関連が明確であるとは言えないこと、「等」が包含する内容が曖昧であること、再掲や類似表現が多いことから、指針としての安定さに欠ける側面を有しているといえる。

新しい学習指導要領では、古典教育に関して、従前、「伝

統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の一事項として立てていた部分を、「知識及び技能」内の「我が国の言語文化に関する事項」に収めている。小・中学校では、小学校低学年に「長く親しまれてる言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと」を加えた以外、方向性を大きく変えてはいない。高等学校では、「国語総合」の古典分野が「言語文化」へと移行して文化理解に関する事項が細分化され、また、「古典A」と「古典B」が「古典探求」となり、「もの」の見方、感じ方、考え方については「伝統的な言語文化」ではなく「読書」の項目に包含されることとなった。本稿は、小学校から高等学校までの古典教育を俯瞰し、再検討するものである。現在の国語科における古典教育は、必ずしも小・中・高の系統が整っているとは言えない状況にある。古典教育の現状を捉え、段階的古典教育に関する新たな方向性を提示したいと考える。

一 古典教育の現状と課題

小・中・高の国語科教科書に掲載されている古典作品を一覧すると、同じ作品が複数の校種で扱われていることに注目される。『竹取物語』や『枕草子』、『平家物語』、『奥の細道』など、すべての校種にわたって掲載されている作品も存する。

国語科教育において、作品「を」教えるのか、作品「で」教えるのかという二側面の甲乙が組上に載せられ、論じられることがある。国語科を含む学校教育が、激しく移り変わる時代に生きる子供たちの「生きる力」を育む役割を担っている以上、作品「で」教えることを追求・開拓し続けることは重要である。一方で、どのような作品でも国語科教育の中で適切に機能するわけではなく、どのような作品「を」教えるのかという問題も、追求・開拓し続ける必要がある。取り上げる作品が児童・生徒の発達段階に合ったものかどうかは、身に付けさせたい力をその作品で育めるかどうかにも関係する。現実問題として、発達段階に応じた作品を新たに作成し、それらの作品のみを用いて小・中・高の国語科教育を成立させることは出来ない。書き下ろし作品の課題や限界も看過できず、既存の作品の精査の積み重ねが、国語科教育の内容の充実や的確性につながる。と考える。

複数校種の共通教材について、教える内容や方法によって差別化を図り、系統化するという考え方は、注意が必要である。同一作品を小・中・高で扱った場合、学習内容の重複が表面的には避けられても、底流の部分で避けられないことが多々ある。授業を組み立てる際、作品の勘所が鍵となるからである。勘所に接近する方法や勘所の問い方に変化をもたせたとしても、児童・生徒がその作品に出会った段階から思考は始まるのであり、「小学校ではここまで」「中学校ではここまで」というように思考を制限することは出来ない。授業で問いとして取り上げられたことのみについて思考が働くわけではなく、次の校種で問われることについても既に思考が到達している可能性があるのである。これは、外から見えにくい部分であるがゆえに、あまり問題にされていないのではないかと考える。

新たな作品との出会いは、自分の中に新たな思考を生み出すきっかけとなる。「読むこと」は、「読解すること」だけでなく、また、「読解」のすぐ先に「活用できる」がくるのでない。「読解」の過程において「考えること（思考）」が繰り返され、時に「新思考」が生成される。この「新思考の生成」こそが、「読むこと」が担う重要な役割ではないだろうか。益田勝実¹⁾は、「話す・聴く・読む・書く」の四つの言語教育が、言語教育に終らないで、『考え・感じとり・精神文化を創り出す』方向へ延長されなければならない

ない」と説く。「新思考の生成」は、「精神文化を創り出す」ことでもあり、多く「読むこと」によってもたらされる。「話すこと」「聞くこと」「書くこと」からも得られるが、「読むこと」で別の思考と出会い、自身の思考が揺さぶられる効果は大きい。

古典の場合、現代文と比べて作品の絶対数が少なく、今後増加していくこともほぼ期待できない。しかし、すべての古典作品が教科書に掲載されているわけでもない。小・中・高の系統的学習を視野に入れて、古典文学の世界を一望し、それぞれの校種で扱う作品の再検討・再配置を試みた場合、現行とはまた違った形が見えてくると期待されるのである。

二 学習指導要領の再検討

古典の系統的学習のいびつさの一因として、小学校の古典教育の歴史が中学校・高等学校に比べて浅いことが挙げられる。中学校から高等学校までの古典教育の系統がある程度整っているところに、小学校の古典教育を加える場合、入門期をずらすことになるため、全体の系統を見直す必要がある。しかし、現状の古典教育では、従来の中学校から高等学校までの系統をそのまま保ったうえで小学校の古典教育が付加されているように見える。同様の課題は、英語

教育にも見られる可能性があり、今後の検討課題に加えた

い。

ここで、学習指導要領に示されている「伝統的な言語文化」の小学校から中学校までの系統に着目する。古典の音読に関しては、小学校中学年の指導事項「ア 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと」が初出であり、小学校高学年でも指導事項「ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと」が掲出される。しかし、古文の読み方を学習するのは、次の校種を待たなければならず、中学校一年の指導事項「ア 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと」に示されるのである。

当然小学校の教科書では、次のように読み方を括弧で付すなどの補助措置が施されている。

それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうて
ゐたり。(『竹取物語』)

しかし、たとえ読み方が示されていたとしても、決まり事の説明がないままに音読の学習が進められていくのは、児童にとって困難を伴う学習となるのではないだろうか。ま

た、もし決まり事の説明を児童が求めた場合、指導者はどのように対応するのが望ましいのだろうか。さらに、中学校で歴史的仮名遣いについて一から学習するにあたって、生徒が系統上のゆがみを感じることはないだろうか。

これは、平成二〇年版学習指導要領以前の、中学校から古典教育が始まっていた時代にはなかったゆがみである。では、小学校段階で歴史的仮名遣いを体系的に指導するのが良いかという点、そうとも言えない。このことについては、後述することとする。

三 教科書に掲載される『竹取物語』

——小学校・中学校——

『竹取物語』は、小・中・高すべての校種の教科書に掲載されている古典作品である。

小学校では、高学年で古典の散文が扱われる。光村図書五年生教科書『国語 五』（平成三一年検定版）の場合、単元「古典の世界（一）」で『竹取物語』が取り上げられる。学習内容は学習指導要領の指導事項アに即して音読を主としており、『竹取物語』、『平家物語』、『徒然草』、『奥の細道』それぞれの冒頭部分の原文と現代語訳、説明文が掲出されている。また、「声に出して楽しもう」、「言葉のひびきやりズムを味わったり、様子を想像したりしながら、声に

出して読みましょう」と学習の方向性が示される。

教育出版五年生教科書『小学国語 五下』（平成三一年検定版）の場合、単元「『古典』を楽しむ」の中で『竹取物語』が取り上げられている。「次のような書き出しで始まる物語を知っていますか」と始まり、冒頭部分の原文、現代語訳、説明文が掲出される。説明文は、次の通りである。

これは、『竹取物語』です。日本で最も古い物語といわれ、今から千百年ほど前に作られました。竹から生まれた小さな女の子が、美しいひめに成長し、やがて月に帰っていく「かぐや姫」の物語として知られているお話です。

ここでは、「かぐや姫」の物語が親しまれていることを前提として、『竹取物語』が「かぐや姫」の物語であると理解させている。『竹取物語』に続いて『平家物語』『祇園精舎』、『伊曾保物語』「はととありのこと」が取り上げられている。学習課題は、「昔から読みつがれている物語を読み、感想を書きましょう」と感想を書かせるものとなっており、学習指導要領のイに即したものといえる。また、次のような感想例も付されている。

「古典」は昔の言葉で書かれていたので、最初はむず

かしそうでした。けれども何度も声に出して読むと、今と同じ言葉もたくさんあることに気がつきました。

『竹取物語』や『伊曾保物語』は、一年生の時に読んだ昔話と似ていました。『平家物語』はリズムがよく、話の意味も深いなと感じました。他の「古典」も読んでみたいと思いました。

この感想例は、簡潔にポイントを押さえたもので、児童の思考を導くであろう。児童の自由な思考を求める場合、どのように位置付けるのが課題である。

古典教育の系統を考えると、「一年生の時に読んだ昔話と似ていました」という点に着目される。小学校では、低学年で昔話や神話・伝承などの読み聞かせ、中学年で短歌や俳句の音読や朗読、高学年で散文の音読や大まかな理解といった流れで古典教育が行われる。小・中・高の流れだけではなく、小学校低学年から高学年に至る系統にも注意したい。

小学校における『竹取物語』の学習をどう位置付けるかという問題は、『竹取物語』の教材的価値を精査し、小・中・高の系統を視野に入れて考える必要がある。

中学校では、平成二七年版の検定教科書五社すべてに『竹取物語』が掲載され、一年生の共通教材となっている。次に、各教科書が原文を取り上げている箇所と、学習目標

を示す。なお、小見出しは私に付けたものであり、教科書によって原文を切り取る箇所が多少異なる場合があることをことわっておく。

○東京書籍

原文

①竹取の翁によるかぐや姫の発見

②天の羽衣と不死の薬を前にしたかぐや姫

目標

・現代語とは異なる言葉や表現に注意して音読し、古典の世界に触れる。

・古典の作品に描かれた人間の心のありようについて考える。

○学校図書

原文

①竹取の翁によるかぐや姫の発見

②帝とかぐや姫の歌の遣り取り

③天人の降臨

④かぐや姫の昇天

⑤残された翁たち

目標

・語り手が伝えようとしたことを捉える。

・内容を理解して音読し、古文特有のリズムを味わう。

○三省堂

原文

①竹取の翁によるかぐや姫の発見

②天人の降臨と対峙する人々

目標

- ③ かぐや姫から翁と嫗への手紙
- ・ 古文の仮名遣いやリズムに注意して音読し、古典の世界にふれる。
- ・ 現代とのつながりを考えて読み、物語のおもしろさについて、自分の意見をもつ。

○教育出版

原文

- ① 竹取の翁によるかぐや姫の発見
- ② かぐや姫の急成長
- ③ 天人の降臨と対峙する人々
- ④ かぐや姫の昇天

目標

- ・ 物語について調べたり、話し合ったりして、そのおもしろさを理解する。
- ・ 古典の仮名遣いに注意して音読し、物語の内容を捉える。

○光村図書

原文

- ① 竹取の翁によるかぐや姫の発見
- ② くらもちの皇子の語り
- ③ 不死の薬の煙

目標

- ・ 古典の文章（文語文・古文）を読み、興味や関心をもってその世界に触れる。
- ・ 仮名遣いに注意したり、リズムを味わったりしながら音読し、古典の文章に読み慣れる。

冒頭の「竹取の翁によるかぐや姫の発見」は、すべての教科書が掲載する。『竹取物語』は古典作品の中では比較的短い部類ではあるが、全文を扱うことが出来るほどの短編ではないため、あらずしを間に挟みながら物語の展開を理解させていくことになる。

目標は、平成二〇年版学習指導要領の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ア（ア）「文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」、（イ）「古典には様々な種類の作品があることを知ることを基本的な受けながら、「話すこと」や「読むこと」も踏まえて設定されている。平成二九年告示の学習指導要領は、「伝統的な言語文化」に関して平成二〇年度版をほぼ踏襲しているが、次年度に改訂が予定されている中学校教科書は、内容が大きく変更される可能性もある。改訂を待つて、内容および系統を考えていきたい。

四 準備期としての小学校古典教育

——昔話の有用性——

稿者は、小学校を古典教育の準備期とする立場をとる。

『竹取物語』を含め、歴史的仮名遣いを伴う原文の学習は、中学校から始めるのが、系統上自然であると考えられる。現状、

作品や学習内容の重複が各所で見られる。個々の作品が発達段階に応じたものかどうかについては次回以降に検討するが、「深い学び」が可能な学年の幅を見極めていきたい。本稿では、昔話を積極的に取り入れることを提示する。学習指導要領では、昔話は神話・伝承とともに小学校低学年の読み聞かせの教材に区分されている。『小学校学習指導要領（平成二九年告示）解説 国語編』では、「我が国の言語文化」を次のように説明する。

我が国の言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、またそれらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。

また、「伝統的な言語文化」の内容を次のように説明する。

我が国の言語文化に触れ、親しんだり、楽しんだりするとともに、その豊かさに気付き、理解を深めることに重点を置いて内容を構成している。

昔話は、我が国の歴史の中で創造・継承されてきた。また、生活にも深く結びついている。昔話を、親しみ、楽しみ、理解する中で「深い学び」が実現することも期待できる。小学校の古典教育で、中学校以降にも学習する古典作品の表面を扱うのではなく、小学校独自の昔話を軸とした学習系統を構築し、中学校の古典学習へとつなげたいと考えるのである。

現在、複数の昔話や神話が教科書に掲載されている。次の表は、光村図書の例である。

学年	題名	分類	国（地域）
1上	おおきなかぶ おむすびころりん	昔話	ロシア
1下	おかゆのおなべ わらしべちょうじや	昔話	ドイツ
2上	いなばの白うさぎ	神話	日本
2下	せかい一の話	昔話	日本
3下	三年とうげ	昔話	朝鮮

「おかゆのおなべ」はグリム童話であり、単元「本はともだち・むかしばなしをよもう」に含まれている。ここでは、「ジャックと豆の木」（イギリス昔話）や「北風と太陽」（イソップ寓話）などが紹介されている。「いなばの白うさぎ」

は読み聞かせとして位置付けられており、その後「この本、読もう」として「カムイチカブ」「さんまいのおふだ」「ももたろう」といった地方に伝わる昔話などが紹介されている。「わらしべちようじゃ」と「せかい一の話」も読み聞かせの教材である。昔話の多くは、低学年の読み聞かせや紹介の枠に収められている。

リユティは、昔話について次のように述べる。

昔話は、ことばの真の意味での世界を包含する文学である。それはあらゆる任意の要素を、純化しつつも、ずからのなかに受けいれることができるばかりでなく、現実に、人間存在のあらゆる本質的要素を反映している。ひとつひとつの昔話でさえ小世界と大世界、個人的事件と公的事件、此岸的関係と彼岸的関係を内包している。³

また、「昔話は本質的な生の過程を描いているような気がする。征服、危険にさらすこと、没落、救済、発展、成熟、展開が非現実的な、しかしそれだからこそ魅力のある人物の姿を通じて、私たちの心の眼の前で演じられる」とも述べる。

ヨーロッパの昔話と日本の昔話とでは、すべての面で共通するわけではないが、リユティが述べる本質的な部分は、

それぞれの民族性を反映しつつ通じていると言える。小澤敏夫⁵は、ヨーロッパの昔話を「人生造型的、教養小説的」、日本の昔話を「人間が自然とどう付き合うかの物語」であると解し、次のように述べる。

それに対して日本の昔話では、無限に広い自然の中に人間の空間があつて、その中へ、無限の自然のどこからか、脅威となる力や、救いとなる力のはたらきかけてくる。このことから考えても、昔話が日本人の伝統的な自然観、世界観を反映していることがわかるのである。

また、多くの昔話を聞く経験を積むことにより、子供の頭の中に「道しるべ」が記憶され、今聞いている話の先を「予期」できるようにするとする。さらに、昔話は、「すじが明快で、様式化されているので、『予期』する力を獲得するのに向いている」とする。昔話は、児童の「生きる力」を育む要素を含んでいるといえよう。

松岡享子⁶は、アメリカの図書館で学んだこととして、読書興味の発達の四段階を示す。第一段階は韻律のある物語や詩を喜ぶ時期（一三、四歳頃）、第二段階は生活に根ざした現実的な物語をたのしむ時期（三、四歳〜五、六歳頃）、第三段階は空想的な物語に向かう時期（前期が四、五歳〜

八、九歳頃で後期が八、九歳、十二、三歳頃)、第四段階は神話・伝説・英雄物語などに興味を示す時期(十二、三歳、十五、六歳頃)である。第三段階を過ぎると、子供によつては空想の世界に無条件に遊ぶことが難しくなるとし、第四段階であつてもなじみのない神話・伝説・英雄物語には手を出さないと述べる。

稿者は、昔話の特質と児童の発達段階から、次のような小学校古典教育の系統を提示する。

低学年…昔話の読み聞かせ

中学年…昔話

高学年…神話、伝説

現在、中学年では古典の韻文のみを扱うことになっているが、本稿では中学年で日本の昔話を学習する有用性を説く。韻文については、今後の検討課題とする。

光村図書 of 三年生の教材として「三年とうげ」がある。これは、昔話ではあるが、朝鮮半島に伝わるものである。三年生あるいは四年生の教材に適する日本の昔話を探っていききたい。

次に、『竹取物語』と同様、竹の中の「小さな」が登場する昔話を紹介する。『日本昔話大成』⁶⁾において「本格昔話」の「誕生」に分類される「竹の子童子」という昔話である。

『大成』では熊本県、大分県、香川県、石川県の分布が示されている。「竹の子童子」は、柳田国男『日本の昔話』⁷⁾、関敬吾『日本の昔ばなし(Ⅱ)』⁸⁾にも収められている。次に挙げるのは、『大成』に掲載されている熊本県人吉市のものを、私に再話したものである。

竹の子童子

昔、三吉という名前の、おけ屋の小僧さんがおりました。そうな。ある日のこと、三吉は、といに使う竹を取ろうと思つて、裏の竹山に行きました。すると、どこかで三吉を呼ぶ声があります。驚いた三吉は、「誰じゃ、おらを呼ぶのは」と、声の主を探しました。すると、「三ちゃん。ここじゃ、ここじゃ」という声があります。三吉がまた、「どこにおるんじゃ」と聞きますと、声の主は「ここじゃ。竹の中じゃ」と答えます。三吉は、声のする竹の方へと近づいて行きました。しかし、あたりを見回しても誰もおりません。三吉が不思議に思つておりますと、目の前の竹から、「三ちゃん、おいらを竹の中から出しておくれよ」と言う声がありました。三吉は、急いで、持っていたのでその竹を切りました。するとどうでしょう。竹の中から小さな小さな子供が出てきました。ありませんか。驚いたのなんのって、三吉はひっくり返ってしまいました。よく

よく見ますと、竹の中から出てきた子供は、五寸（約十五センチメートル）くらいのおおきさです。そしてその子供は、「ありがとう。三ちゃん」と言うのでした。その声は、小さな体に似合わない、大きな大きな声でした。「お前さんは、いったい何者なんでしょうかいうのう」と、三吉はその子供を手のひらにのせて聞きました。子供は、「おいら、悪い竹の子に引つつかまえられて、竹の中に入れられたんじや。それで、天に帰ることが出来んようになったんじや。困っておったところに、ちょうど三ちゃんが来たもんだから、こうして三ちゃんに助けてもらおうことになったんよ。おいら、今まで生きてきて、こんなに嬉しいことはなかったわいなあ。」と言うのでした。そこで三吉は、「おらの名前を、お前さんはなんで知つとるんですかいうのう」と、また、子供に聞きました。すると子供は、「おいらは、世界のことは何でも知つとる」と言います。三吉が、「お前さんの名前は、何と言うんですかいうのう」と聞きました。子供は、「おいらは、竹の子童子って言う者じや」と答えました。今度は三吉は、こう聞きました。「竹の子童子さん、年はいつたいおいくつなんでしょうかいうのう」。竹の子童子は、「今年で千二百三十四歳じや」と答えました。三吉は、「竹の子童子さんは、すぐに天に帰りなさんかいうのう」と聞きました。すると竹の子童子は、「帰ろうと思えばすぐに帰れるんじやが、恩返しをせんままに天に帰ってしまうと、お姫様に叱られま

すから、三ちゃんにお礼をしてから帰るんじや」と言いました。三吉が、「おらにお礼ですか。何をしてくださるんですかいうのう」と聞くと、竹の子童子は「おいら、七つだけ、三ちゃんの願いごとを叶えてやろう」と言います。三吉は、にわかには信じることが出来ません。「本当ですか。嘘を言うとするんじやないですか」と、三吉が重ねて聞くと、竹の子童子は、「天人は、嘘はつかんのじや」と言いました。そして、竹の子童子は、不思議な呪文を三吉に教えました。三吉が口の中で、

竹の子、竹の子、お侍になあせ

竹の子、竹の子、お侍になあせ

竹の子、竹の子、お侍になあせ

と唱えると、三吉はすぐにお侍さんになりましたそうな。

三吉はそれはそれは喜んで、竹の子童子にお礼を言うと、すぐに武者修行に出かけましたそうな。これで、おしまい。

おわりに

「竹の子童子」の教材としての可能性は検討する必要があるが、『竹取物語』を想起させる世界をもつこともあって、興味深い昔話である。

昔話は、構造と内容の両面において国語科教材に適している部分を多く備えている。また、様々な話型の昔話があ

ることも、我が国の文化を考えるうえで有用である。光村
図書の教科書では、小学校中学年（三年上）の説明文を通
して文章の「はじめ」「中」「おわり」を学習する。特有の
構造をもつ昔話は、説明的文章や現代の物語・小説とは異
なる、「読み解く力」を育むことにもなるであろう。

次稿以降、引き続き小・中・高の段階的古典教育につい
て考えていく。

〔注〕

- (1) 益田勝実「文学教育の問題点」（『日本文学の伝統と創造』
1953 岩波書店）『益田勝実の仕事』2006 ちくま学芸文
庫 所収）。
- (2) 小学校検定教科書『国語五』（平成31年検定版 光村図
書）。
- (3) リュティ『ヨーロッパの昔話 その形と本質』（小澤敏夫
訳 2017 岩波文庫）[1947年初版の決定版である第7版
（1981）の全訳]。なお傍線は私に付した。
- (4) リュティ（注3に同じ）『昔話の本質』（野村滋訳
1994 ちくま学芸文庫）[1962年初版の第3版（1968）の全
訳]。なお傍線は私に付した。
- (5) 小澤敏夫『改訂昔話とは何か』（2009 小澤昔ばなし研究
所）。なお傍線は私に付した。
- (6) 松岡享子『子ぶつと本』（2015 岩波新書）。
- (7) 関敬吾『日本昔話大成』第3巻・本格昔話二（1978 角
川書店）。

(8) 柳田国男『日本の昔話』（1960改訂版初版、2013新版 角
川ソフィア文庫）。

（本学准教授）